

平成 22 年度 海外研修派遣 報告書

京都第二赤十字病院 山本絵美

私が今回この研修に参加した一番の目的は自己啓発である。世界の最先端技術の動向や、研究に対して興味があり、実際に目の当たりにしてみたいと思い、参加した。成果としては、同じ志を持つ仲間とともにとても刺激的で有意義な一週間を過ごすことが出来たのではないかなと思う。スタンフォードの講師陣の将来展望はどれも具体的で必ず実現すると確信できた。特に High Field MRI, Molecular Imaging に関しては大きな将来性を感じた。また、さまざまなモダリティがある中で PET-CT, MR-HiFU などのようにそれぞれを組み合わせることによりもう一段階上の新しい領域に踏み入れることができ、さらに新たなモダリティが生み出される可能性も十分あるのではないかなと思う。

日本とアメリカを比較してみると保険制度に大きな違いがあるせいか、アメリカでは本当に必要で吟味された検査しか行われていないように感じた。それゆえにアメリカでは一人の患者に対して十分に時間をかけており、一患者あたりのスタッフ数も明らかに多い。これが私にとって今回一番印象に残った事であった。日本のように時間に追われながら多数の検査をこなさなければいけないということもなく、余裕を持って検査が行われているところが少し羨ましく感じた。しかし、同じ放射線技師であっても細かく分業され、専門化されていることで技術の一つ一つのポテンシャルは高いのかもしれないが、日本の放射線技師のように広い視野を持って患者をみる事が出来ないように感じた。日本でも専門技師を作り、各モダリティに対して専門化していこうという動きがある。専門化することにより技術のポテンシャルの向上を促すことは大切であるが、細分化されてしまって周りが見えなくなってしまうのはいけない。つながりを絶やすことなく、広い視野を持った日本独自の放射線技師像というものを作っていく必要があるのではないだろうか。

今回の研修は私にとってはどれも新鮮で興味深いものばかりで、今後の私の技師人生にとって多大な影響を与えたに違いない。放射線技師という仕事は縁の下の力持ちに徹していることが当たり前のようにになっているが、世界的な広い視野を持って医療の最先端に立ち、医療を引っ張っていく立場にあってもいいのかもしれない。この研修はその一歩となっているのではないかなと思う。

最後になりましたが、この研修にご尽力いただいた日本放射線技術学会、スタンフォード大学および GEHC-J の皆様にこの場をかりて心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

写真コメント:

Exciting な講義で我々を魅了し続けた Moseley 先生 (左) とともに

